

2020年度 創造的な教育実践

1. ゼミの武蔵の実践

1-1. 学部横断型課題解決プロジェクト

経済学部 助教 大熊 美音子

本授業は、2008年度に正規授業となり、今年度で13年目を迎えました。

2020年度は、前学期、後学期ともに1クラスを開講しました。前学期、後学期の学部・学科別の履修者数は次のとおりとなっています。内訳をみると、前学期は、経済学部が6名、人文学部が7名、そして社会学部が10名の合計23名、後学期は経済学部が4名、人文学部が4名、そして社会学部が9名の合計17名です。男女比を見ると、前学期は男性12名、女性11名(男性比率52.2%)、後学期は男性6名、女性11名(男性比率35.3%)で、例年より男性の履修者が多い結果でした(表1)。

今年度は履修者数がやや少なく、特に後学期には昨年度同様に、経済学部と人文学部が各4名ずつとなったため、フェーズ1には2名でのチーム編成が生じました。少人数でも発表の質量には影響はなかったものの、本授業のもうひとつの目的である、チーム活動での学びや成長機会の観点に限れば、チームワークの形成やコミュニケーションにおける葛藤の経験機会が十分になされず、また学部のバランスの点でも、フェーズ2での3学部での活動に多少とも影響がありました。この点は、次年度の課題と受け止める必要があります。

表1 2020年度学部横断型課題解決プロジェクト履修生(学科・学年・学科・性別)

学科	セメスター		前学期						後学期							
			2年次生		3年次生		4年次生		学科合計	1年次生		2年次生		3年次生		学科合計
			男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女	
経済	1	2	1	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	1		
経営	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	2		
金融	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	1		
英語英米文化	1	1	1	1	0	0	4	0	0	0	0	0	1	1		
ヨーロッパ文化	1	0	0	1	0	0	2	0	0	1	0	1	1	3		
日本・東アジア文化	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0		
社会	2	1	3	0	0	0	6	0	1	1	0	1	6	9		
メディア社会	0	0	3	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0		
性別合計	7	5	8	2	0	1	/	0	2	3	0	3	9	/		
履修生合計人数	23						17									

今年度は新型コロナ拡大にあたり、はじめてオンラインで授業を実施しました。主にZoomとClassroomにより、前学期を通してオンライン実施となりました。後学期においてはフェーズ1ではオンラインで、フェーズ2では対面形式を主にするハイブリッドで行いました。各学期の概要は以下のとおりです。

<前学期>

全学の方針に従い、フェーズ1は3回(通常7回)、フェーズ2は通常通り8回実施。企業との合同授業は2回(通常3回)、キャリアコンサルタントとの面談も2回(通常3回)に短縮。最終報告会(※)を除くすべてをオンラインで実施。

<後学期>

前学期を踏襲し、新型コロナの感染状況を考慮しながらフェーズ1をオンラインで開始。中間報告会およびフェーズ2は対面形式に移行。その間も、学生の多様な学習スタイルに柔軟に対応できるよう、授業外学習環境も含めてオンラインと対面の両方の環境を整備。対面で最終報告会(※)を実施した後は、緊急事態宣言再発出となり、残り2回の授業をオンライン形式で実施。

(※最終報告会は一般視聴者にオンライン配信を実施。)

オンライン授業は、本授業独自の SNS との併用もあり、基本的な情報共有は問題なく、予想以上の水準を満たすことがわかりました。しかしオンラインの先にある、より深い絆によって築かれるチームワークや、自らの力でより信憑性の高い情報に到達して得られる深い考察、社会の現場に臨場することによって体得される本質的な理解がもたらす境地にまでは、オンラインのみで到達することは困難であることもわかりました。最終報告会を前後学期とも対面形式で実現できたことは、上記を実感するにおいて象徴的な機会となりました。このようにオンラインとの比較によって本授業の意義が改めて明確化したものの、履修を検討する学生が事前に理解することは難しく、履修ガイダンスにおいて今後一層この点についての説明をしていく必要性があります。

今年度に変更導入した取り組み事例は以下です。

1) オンライン化で限定される学生の学習環境を損なわないための機会提供

学生が入構できないことによって被る学習機会の損失を補うため、物心両面でのフォロー体制が必要となりました。PC の貸与やルーター貸出しはもとより、ガイドブックや企業のパンフレットなど、事前学習のための資料は極力印刷し郵送しました。企業情報については、事前に教職員が企業訪問を行い、動画資料を作成した企業もありました。前学期には、中止されたキャリアコンサルタントとの初回面談の代わりに、学部担当教員が学生の「行動目標」に対してコメントをフィードバックしました。また4月に自由参加型のオンラインミーティングを開催し、Zoom の使い方のトレーニングと学部ごとの自己紹介の機会を作りました。これには、結果全員が参加しました。授業外学習のためには Zoom 教室を常設し、いつでも学生同士、時には教員とも自由に話し合える場を作りました。対面でのインフォーマルなコミュニケーションができない分を SNS 内で教職員から個別のコメントを送る機会を増やすなど、学生がオンラインの中で孤独にならない環境を心掛けました。これらの配慮は本プロジェクト遂行のためには必要不可欠であったと考えられます。

2) 授業開始前の事前課題の充実(前学期のみ)

例年の課題図書レポートに加えて事前課題を課すことで、通常の全 15 回分に遜色ない水準を維持しました。フェーズ1の各学部別の課題テーマと、担当企業ごとの学部共通テーマについて、それぞれ段階的に取り組ませました。学生は個人レベルでの調査から開始し、徐々にその課題遂行のために自発的にオンライン上に集まり、ディスカッションを行うようになりました。その進捗は毎週 SNS 上で各教員からフィードバックを行いました。その他、従来は授業開始とともに始めた日記の投稿や役割分担の決定など、チーム形成を促す働きかけを授業開始前に行いました。その結果、5月11日の授業開始時には、ある程度の課題の深堀りとチーム形成ができました。事前の学部共通テーマは以下です。

- ・「左官とは何か」:原田左官工業所チーム
- ・「金型とは何か」:牧野プライス製作所チーム

3) 多様な形式での「企業訪問」の実施

通例ではフェーズ2に行われる企業訪問は、協力企業により感染防止対策が異なるため、今年度は企業側の要望に合わせて様々な形で試みました。Zoomでのインタビューではむしろ効率よく複数の部署の多様な立場の方々のお話を聞くことができました。感染防止のため複数回に分けて訪問できたチームはその分深い理解に到達することになりました。企業側の意向によってフェーズ1で企業訪問を実施したチームもありました。これについては、チーム形成も未熟で授業の意図を十分には理解できていない時機での訪問が良いかどうか慎重に対処する必要があります。総じて企業訪問では学生が企業の想いをどれだけ受け止められるかが重要であり、その手段としては、ひと手間をかけてでも足を運び、汗をかき、肌で感じることで得られることのほうが格別の価値があると考えられます。

本授業は、オンラインと対面の双方の授業の往来ができた稀有な機会となりました。その中で学生に起きている「授業に対する姿勢」の変化は見過ごせません。学生は、オンラインの限られた授業環境に前学期を通して戸惑いつつ適応した結果、後学期には必ずしも「対面授業」に必要性を見出さなくなっていました。しかし「オンライン」と「対面」が象徴するものの違いは深刻です。学生が“紙”の本を読む、メモをとる、検索機能では見えない事象に疑問を持つ、深い考察をする、汗をかく、相手と視線を合わせて議論することなどの意味について、本授業では一層重視していく必要があると考えられます。

この授業は2つの柱から成り立っており、一つが、課題提供企業の CSR 報告書の作成、もう一つが社会人基礎力の育成と自己評価能力を高めることです。

表2は、後者の社会人基礎力に関するデータになります。前学期と後学期を合わせた期間(通年)における履修生全員の平均値を見ると、受講前(事前評価)と受講後(事後評価)の間で最も伸びた能力は状況把握力でした(1.0ポイントのプラス)。これは、瞬時で情報を共有できる SNS 世代である学生たちが、今までとは異なる思考方法でアプローチしていかなければ、課題が進まない経験をする中で、置かれた立場や能力に応じて、チームや組織がうまく機能するように自己表現ができるようになったと考えられます。他方、最も“伸びなかった”能力は規律性でした(マイナス 0.4 ポイント)。これは事前評価の段階で、12 項目の中で最も高いこと(事前評価で 8.1 ポイント)に注目しておく必要があります。これは興味深いことに毎年同じ傾向が見られます。学生はこの横断ゼミを通して自己と他者の関係性を理解することで「規律性とは本来何なのか」を知るのです。つまり正しく自己評価ができるようになった結果がこれであり、規律性は“伸びなかった”のではないと言えます。

表2 社会人基礎力の事前・事後自己評価【2020年度履修生】(学生による自己評価)

年度		2020年度		
カテゴリー/要素		事前評価	事後評価	差異(事後-事前)
通年⑫要素平均		6.9	7.5	0.6
1. 前に踏み出す力(通年)		6.8	7.6	0.8
①主体性	前学期	7.1	8.4	1.3
	後学期	7.4	7.7	0.3
	通年	7.3	8.1	0.8
②働きかけ力	前学期	6.6	7.7	1.1
	後学期	6.1	6.7	0.6
	通年	6.4	7.3	0.9
③実行力	前学期	6.7	8.0	1.3
	後学期	6.9	6.7	-0.2
	通年	6.8	7.4	0.6
2. 考え抜く力(通年)		6.2	6.7	0.5
④課題発見力	前学期	6.5	7.7	1.2
	後学期	6.8	7.1	0.3
	通年	6.6	7.4	0.8
⑤計画力	前学期	5.5	6.5	1.0
	後学期	5.6	5.6	0.0
	通年	5.5	6.1	0.6
⑥創造力	前学期	6.4	7.1	0.7
	後学期	6.4	5.8	-0.6
	通年	6.4	6.5	0.1
3. チームで働く力(通年)		7.3	7.8	0.5
⑦発信力	前学期	6.6	7.5	0.9
	後学期	6.5	6.7	0.2
	通年	6.6	7.2	0.6
⑧傾聴力	前学期	7.8	8.5	0.7
	後学期	7.5	8.5	1.0
	通年	7.7	8.5	0.8
⑨柔軟性	前学期	7.4	8.2	0.8
	後学期	7.5	8.2	0.7
	通年	7.4	8.2	0.8
⑩状況把握力	前学期	7.0	8.1	1.1
	後学期	6.7	7.7	1.0
	通年	6.9	7.9	1.0
⑪規律性	前学期	7.9	7.7	-0.2
	後学期	8.3	7.6	-0.7
	通年	8.1	7.7	-0.4
⑫ストレスコントロール力	前学期	7.1	8.1	1.0
	後学期	6.7	6.1	-0.6
	通年	6.9	7.2	0.3

*表は小数点第2以下四捨五入

社会人基礎力は、12 の要素に分かれています。大きくは、前に踏み出す力、考え抜く力、そしてチームで働く力の3つのカテゴリーに分かれています。この3つのカテゴリーで見ると、考え抜く力は事前評価が低く、前に踏み出す力は上昇幅が一番大きかったという傾向が見られます。不測の事態が起こる世の中に生きながら「頑張る」ことの価値がわからない世代だと言われる現代の学生が、横断ゼミの履修を通じて、社会人基礎力の向上を実感し、学部ゼミでの活動や学外での活動を充実させたものにしていくことが期待されます。

今年度(2020年度)に課題を提供いただき、授業に協力していただいた企業は、有限会社原田左官工業所、株式会社牧野フライス製作所、しのはらプレスサービス株式会社、大陽ステンレススプリング株式会社の4社です。毎年ご協力くださる企業は、CSR・SDGs 活動の先進企業としてしばしばメディアに取り上げられている企業や、社会課題の解決を自社の戦略課題の1つとして位置づけ、より積極的な取り組みを行っている企業も多くあります。今年度は、新型コロナウイルス拡大防止対策の影響で、企業のご協力自体が難しいことも考えられました。しかし前期2社は、それぞれ武蔵大学OBが経営者と総務部のゼネラルマネージャーであるご縁に助けられました。後期2社も含め、4社中3社が過去にも本プロジェクトにご協力いただいた経緯があって今回のご協力に至りました。学生たちは、大学OBからの期待と、協力経験企業が求める進化の期待に応えたいという熱意のもと力を結集して取り組み、厳しくも温かい環境に恵まれた貴重な経験ができました。

協力企業の担当者様は総じて、横断ゼミを通して本学学生を高くご評価くださいます。毎年、歴代の協力企業(一部上場企業を含む)による採用実績が途切れないこともその成果と考えられます。授業後の、企業へのアンケート調査には、「学生の報告書やプレゼンテーションを、実際に社員教育の教材として活用している」、「自社が社会からどう見られているか新しい気づきを得られたことを大変満足した」「武蔵大学の学生に対する印象が変化した」などの回答を毎回いただきます。今年度の協力企業からも同様に、期待以上の成果を得られたとの言葉をいただきました。このように横断ゼミの取り組みが、企業や社会に具体的な貢献をもたらしていることは、成果のひとつと考えられます。

また、今年度もプロジェクト終了後の「振り返り」の授業内容を拡充して実施しました。これまでも当プロジェクトでは、「振り返り」のプロセスを重視し、キャリアコンサルタントとの面談や受講生間の相互フィードバックを実施してきました。様々な視点から、ポジティブ、ネガティブ両面を丁寧に徹底して振り返る作業は、この「振り返り」こそが成長において重要なプロセスであることを、学生たちに気づかせることを意図しています。自身の成長において他者の存在がいかに重要で貴重なものなのか、コミュニケーションの意味について認識を新たにした学生は多く、社会における企業の姿と、組織における自己の在り方を重ね合わせた、複合的な理解を促す授業であると言えます。

最終回の授業では、これまでの「振り返り」を未来にどう役立てていくのかを視野に、最後のチーム活動を行います。ゲストとして過去の受講生が登壇し、横断ゼミ終了後の学生生活や就職活動にどう役立てたのかについて話してもらうことが恒例となっています。履修学生にとって「自分の未来像」を重ねる対象である先輩たちから、横断ゼミで培った様々な力を就活や卒論に発揮できた成功経験が「自分の言葉で」語られました。

ある4年生は、横断ゼミで始めた「日記を書く習慣」を続けていました。つらい就活の間も、自身の考えを常に言語化する習慣が支えになったとのことでした。この「言語化」についてのメッセージは、オンライン授業に移行した今年度の履修生には特に説得力があったと考えられます。Zoom以外のコミュニケーション手段が文字表現に頼らざるを得なかった今年度の学生たちは、総じて日記や企業への依頼文を書く機会によって文章表現力が著しく磨かれ成長したからです。また別の、留学を経験した4年生からは、未知の環境に適応することの困難を横断ゼミの経験によって乗り越え、「すべて自分の捉え方次第なのだ」という力強いメッセージを履修生に発信しました。「横断ゼミ」という同じ経験を共有した学生の言葉は親近感と説得力があり、この時間は、このプロジェクトのスピリットが学生間で継承されていく重要な機会となっています。

このように、横断ゼミで学生自身が最も成長を実感することとして、「これまでの知識を自ら積極的に深め、応用することができるようになること」が挙げられます。横断ゼミは、大学での学びと社会での実践を繋ぐ、まさに「横断」の役目を果たしています。今年も、横断ゼミを卒業した学生によって、夏のオープンキャンパスに横断ゼミのブースが初めて開設され、高校生に向けて横断ゼミのアピールをしました。また、ゼミブログの一面にできたコーナー「先輩から未来の履修生へ」では、学生たちがチームの垣根を越えて再結集し、映像やパンフレットの製作などを通して、「学生の力で横断ゼミを広めよう」と、各学科の専門分野を活かした活動を進めています。学生たちの横断ゼミでの経験は、培った能力を柔軟に発揮できる場を学内外に積極的に求めて、自らの力で新たな行動を起こすことに着実に繋がっています。



オンライン授業中の様子(前学期)



2020年度履修生が制作したCSR報告書

1-2. ゼミナール対抗研究発表大会(経済学部)

経済学部 准教授 蓮見 亮

<2020 年度「ゼミナール対抗研究発表大会」の概要>

本学のゼミナール連合会が主催する経済学部・ゼミナール対抗研究発表大会(通称「ゼミ大会」)は2004年の第1回より15年以上続く「ゼミの武蔵」を代表するイベントの1つとなっている。今年度のゼミ大会は、新型コロナ拡大の影響に伴い12月12日よりオンライン方式で実施された。27チーム6つのブロックに分かれ、20分間のプレゼンテーション動画を通して日頃の研究成果を競い合った。

各ブロックでは、その専門領域に応じて選出された4名の審査員が①発表資料、②話し方・文章表現、③着眼点、④調査・分析、⑤論理整合性の5つの観点から審査を行った。従来はこれに加えて⑥対応力という評価項目があったが、本年度は急遽オンライン方式となったこともあり質疑応答が省略されたため、評価項目も変更になった。審査員は、従来と同じく2名を実務界で活躍されている本学OB・OGに協力を仰ぎ、残り2名を本学教員で担当した。厳正な審査の結果、各ブロックの優勝・準優勝チームが選ばれ、それぞれ賞状・賞金が授与された。

ゼミ大会は発表のみに注目が集まりがちだが、それまでの準備期間で学生にとって多面的な教育的効果が見込まれる。発表テーマに関する専門的知識の習得、深化はもちろんのこと、学生は発表の準備段階における学生間での役割分担や作業を通じて、チームワークや問題解決能力を養う有用な機会を得ることができる。プレゼンテーションには単純に学術的な正確性や理論的な理解と応用だけでなく実社会への応用性、さらにはより広い対象に理解を促すための能力が要求される。本年度の発表方式はプレゼンテーション動画であったため、ITリテラシーも要求されることとなった。これらから、学生は通常の講義やゼミナール活動のみでは得られない経験、学習の機会を得ることができる。一方で、本年度は審査員と直接顔を合わせ質疑応答する機会は設けられなかったため、企業等の実務・社会経験が豊富なOB・OGが審査員として含まれているという意識は希薄だったかもしれない。

本学のゼミ大会の大きな特色は、大会自体を学生自身が運営をすることにもある。ゼミ大会は、武蔵大学ゼミナール連合会が経済学部教員や大学スタッフ等のサポートのもと、自ら企画運営を行う。そのため、ゼミ大会での大会運営に関わる学生には対外機関や関係者とのコミュニケーションが求められ、大会の準備は社会人として将来役立つスキルを養う過程としても機能する。

ゼミ大会の準備は4月から始まるが、本年度は新年度早々に学生の学内への入構が禁止となり、準備は困難を極めた。7月には前学期に引き続き後学期授業のオンライン化が大学により発表され、教員として本年度のゼミ大会のオンライン実施を決断することとなった。実際、当初会場実施を予定していた12月12日に東京で確認された新型コロナ感染者数は当時として過去最多の621人となり、全国の感染者数も初めて三千人を超えたことから、ゼミ大会のオンライン実施はやむを得ない措置であった。様々制約がある中、前例のないオンライン方式のゼミ大会の企画、準備および運営に携わった学生にとっては貴重な経験となり今後の自信につながったことと思う。教員サイドとしても、動画掲載用のウェブサイト作成のために情報・メディア教育センターと折衝を行うといった不十分かもしれないが必要なサポートを行った。

<今後の課題>

今後も継続してゼミ大会を実施するにあたって、2021 年度は会場実施ができるのか、あるいは本年度と同じくオンライン実施を余儀なくされるのか見通すことが最重要課題である。準備は会場実施とオンライン実施の両方に対応できるよう進めるのが理想であるが、来年度のゼミナール連合会(ゼミ連)の体制でそれが可能なのか。会場実施が可能だったとしても、いわゆるビフォアコロナと同様は不可能であり、三密を避ける運営は不可避であるし、懇親会の実施も難しい。次年度のゼミ大会担当教員には難しい舵取りが迫られる。仮にオンライン実施となる場合には、会場実施と同様、画面越しであれ審査員と顔を合わせ、質疑応答をする機会を設けることを要望したい。プレゼンテーションにおいて、質疑への対応はスライドの説明と同じかそれ以上に重要な要素だからである。

前年度の報告書には、①参加ゼミナール数の増加、②外部の聴講者の増加を促す施策、③主催するゼミ連の体制強化、の3点が課題として挙げられていた。①参加ゼミナール数は前年度 31 チームより微減となったが、急遽オンライン方式となったことからすれば及第点ではないか。②について、プレゼンテーション動画がどの程度視聴されたか把握していないが、来年度以降もオンライン方式となる場合、それ以前の問題として動画サイトの公開範囲を考える必要がある。本年度は、アナウンスしていないが OB・OG 審査員のために急遽動画の公開範囲は限定しないこととなった。公開を学内に限定するためにゲスト ID の発行をゼミ連に案内していたが通じていなかったようで、次回もオンライン方式となる場合には着実な準備が求められる。

最も懸念されるのは③のゼミ連の体制についてである。本年度は学内への入構制限や授業のオンライン化、さらには行政による外出自粛要請、緊急事態宣言により運動部、サークル、学生団体全般の活動に大きな制約がかかった。新入部員が獲得できなかつたり、それだけでなく事実上活動休止に追い込まれたりする団体がある中で、ゼミ連も例外ではない。来年度も同様の状態が続くようであればゼミ連の存続が危ぶまれることにもなりかねず、経済学部としてゼミ連に必要な支援を行うこと、あるいは新たなゼミ大会の実施体制を模索するといった方針の転換を迫られることも想定しておくべきである。

<出場チーム、および発表テーマ一覧>

ブロック	ゼミ名		タイトル
経済 ブロック	二階堂専門ゼミナール第2部	○	プラスチックゴミ問題
	根元専門ゼミナール B		投票に及ぼす親の影響
	広田専門ゼミナール第2部	◎	Twitterは観光消費に影響を与えるのか？重回帰分析を用いた実証分析
	松川専門ゼミナール第2部		水資源不足について
経済・経営 ブロック	大野専門ゼミナール B	○	「政治経済のトリレンマ」を成す三要素が示す各国の国家運営の性格と、グローバル化が進展した現代社会における今後の国家運営の動向に関する考察
	伊藤専門ゼミナール第2部		新聞業界の現状、今後の活路
	高橋専門ゼミナール第2部		企業におけるテレワークの導入
	朴専門ゼミナール第2部	◎	コロナ禍で、行動経済学を用いることで運動継続はできるのか。
	吉田専門ゼミナール第2部		コロナウィルス流行後のインフレ・デフレリスクとその対応
経営・会計 Aブロック	荒田専門ゼミナール第2部		会計基準のコンバージェンスは成功するのか？ー収益認識基準を題材に
	海老原専門ゼミナール第2部		IFRSの任意適用がコーポレートガバナンスに与える影響
	古瀬専門ゼミナール第2部		「善意の資本」を駆動するーベンチャー・フィランソロビーに注目してー
	森永専門ゼミナール第2部	◎	女性管理職を当たり前存在に
	山崎専門ゼミナール第2部	○	新型コロナウイルス感染拡大に伴うマスク業界への新規参入と、それに伴う副次的利益の関係
経済・金融 Aブロック	大野専門ゼミナール A	○	都営バスの赤字系統存続のために
	神楽岡専門ゼミナール第2部		金融の諸問題とその解決策の提示
	下川専門ゼミナール第2部		系統的手法による covid-19 の分析
	茶野専門ゼミナール第2部	◎	日本人は株主優待が好きか？～イベントスタディを用いた分析～
経営・会計 Bブロック	高橋専門ゼミナール第1部		地域活性化とアントレプレナーシップ
	山崎専門ゼミナール第1部	◎	「事業を創る人」の学生時代の特徴
	山下専門ゼミナール第1部		ドラッグストアの成功の秘訣
	森永専門ゼミナール第1部	○	オンライン授業による学生の学習モチベーションの低下
経済・金融 Bブロック	田中専門ゼミナール第1部	○	異常気象にどう立ち向かうのか？ーエビデンスに基づく効果的な異常気象対策の提案
	茶野専門ゼミナール第1部	◎	女性活用やワークライフバランス施策による労働生産性への影響
	根元専門ゼミナール A		投票率の要因分析ー男女格差ー
	広田専門ゼミナール第1部		どのような地域環境が出生率に影響を与えるのか
	松川専門ゼミナール第1部		アジアにおける海洋プラスチック汚染

※専門ゼミナール第1部は2年生ゼミ、専門ゼミナール第2部は3年生ゼミ、AまたはBは縦ゼミ(2年生、3年生合同)

※◎印はブロック優勝、○印はブロック準優勝

1-3. 卒業論文報告会(人文学部)

人文学部 教授 黒岩 高

2020 年度の人文学部卒業論文報告会は、英語英米文化学科、ヨーロッパ文化学科、日本・東アジア文化学科の三学科については1月 26 日(火)に、今年度より初めての4年生を送り出すことになるグローバル・スタディーズコース(英語プログラム)の「Capstone Project Symposium」については1月 27 日(水)に開催された。例年、この報告会は対面の形で行われ、2012 年以降は一般に公開していたが、本年度は新型コロナの拡大が原因で参加者は学内に限られ、かつ Zoom を用いたオンラインの形で行われた。

3学科1コースのそれぞれが、異なる会場で報告会を開催するため、部分的な参加に限られたが、全体を俯瞰するなかで、FD の観点から気付いた特徴的な点を以下に述べたい。

指導教授の推薦をもとに各学科・コースから選ばれる報告者(4年生)の卒業論文および Capstone Project は、学術的に内容が優れたものに限らず、学科によっては、テーマの設定や分析の視点・方法などにとってもユニークな点がみられるものも含む。聴講学生を中心とする3年生が、これから卒業論文の執筆を本格化させていくうえで、柔軟な思考を大切にしてもらうことを期待しての配慮でもある。報告者にとっても、みずから執筆した卒業論文の顕彰という意味合いだけでなく、100 名近い聴講学生を前に、限られた時間内で論文のポイントを伝えるべく、さまざまな工夫を凝らしたプレゼンテーションの機会を得ることになる。さらに、報告学生と聴講学生とのあいだには、限られた時間ではあるがディスカッションも行われ、本学の重視する日常的なゼミナールの延長線上に、インタラクティブな学修の効果が期待されている。

報告者となる4年生は、いずれの場合でも、事前に準備したハンドアウトとパワーポイント、さらに自身の音声やゼスチャーといったメディアを複合的に駆使して、卒業論文の要点をアピールしていた。ハンドアウトとして配付されるレジュメは、おおむね A3で1枚(表裏)におさまる適切な内容にまとめられており、文字情報だけでなく、報告者が分析を加えた画像資料なども適宜取り込まれている。1年次のいわゆる基礎ゼミナールからスタートするゼミナール学修の積み重ねが効果を発揮している。

例年、報告者のパワーポイントによるプレゼンテーションのスキルについては、プロジェクターから映し出される文字が小さすぎる、あるいは地図、風景、建築物などの画像についても同様であるといった欠点、あるいはパワーポイント原稿そのものの稚拙さなどが指摘され、改善の余地が目立っていた。これは人文学部のディプロマ・ポリシーの4「個人またはグループで主体的にテーマを選んで調べ、データの整理・分析・総合を行い、文章を論理的に構成し、現代的ツールを用いて能動的に表現し、自説の客観性を高めるために対話する力を身につけていること」の「現代的ツールを用いて能動的に表現する能力」が十分に獲得されていないことを示しており、等閑視できない問題である。

さらに、昨年度の報告書では、この状況は報告者＝制作者側のスキル不足の問題にとどまらず、報告者に、同じくディプロマ・ポリシーにある「自説の客観性を高めるために対話する」という姿勢が、十分に意識されていない可能性をも示唆するものとして警鐘の対象となっていた。

ところが、本年度についてはこの欠点が大きく解消されていた。授業がオンラインで行われ、データ通信量の軽減のため多くのゼミナールで報告担当の学生が「顔出し」をしない状況下で報告を工夫せざるを得ず、そのため画面上でのプレゼンテーション能力を磨かなければならなかったものと推察される。さらに、就職活動もオンラインで行われることも加わり、プレゼンテーション能力だけでなく、オンライン上でのコミュニケーション能力も求められたのではないかと思われる。それは、例年に比べ音声による質疑応答がやや活発に行われ、チャットによる質問がかなり活発に行われた研究報告が見られたこと

にもつながっていよう。

「対面でゼミナールを行うことができない」「オンラインで就職活動が行われる」という特殊な状況下で学生たちが自ら習得したという意味で、少々皮肉な「効果」ではある。しかしながら、見逃してしまうにはあまりに大きな「効果」であったように思う。

個々の教員がその効果を意識して授業運営を工夫する必要があることはもちろんのこと、教育カリキュラム上に、何とかその利点を取り込む方法を模索すべきであるように思われる。

なお、本年度の卒論報告会・Capstone Project Symposium の報告題目は以下のとおりである。

【英語英米文化学科】

- Why did Cathy Freeman take a victory lap with the Aboriginal and Australian flags together at the 2000 Sydney Olympics?
- ヘスターはなぜ魅力的に映るのか
- The Ideal American Family in the 1950s: Mass Consumption and Cold War Competition from Gender Perspectives
- バンクシー: ミュージアムの「内」と「外」をつなぐストリート・アーティスト
- The Development of Virtual Museum at Musashi University: Museums and Covid-19
- 海外翻訳舞台作品にジャニーズタレントを起用する意義について
- アメリカのチアリーダーからみる多様性の受容-人種差別撲滅への実現に向けた可能性-
- Sexual Prejudice Exposed in *Nineteen Eighty-Four*: Who is Julia?

【ヨーロッパ文化学科】

- ルノワールが追及した女性美
- ゴシック・ロックとは何か
- ヨーロッパにおける人種観と白人至上主義
- フランス的統合を考えるーグローバル社会における移民統合の新たな諸問題ー
- Die Identitätsbewegung Deutschland –Betrachtungen über die neue rechtsextreme Bewegung in Deutschland(アイデンティタリアン運動ドイツドイツにおける新興極右運動についての考察)
- ドイツ語, 英語, イタリア語における受動態ー『ハリー・ポッターと賢者の石』内に見られる受動態表現を比較してー

【日本・東アジア文化学科】

- 金史良文学論
- 近世におけるアイヌ民族の鋤形について
- 夢野久作の探偵小説観ー『瓶詰の地獄』から
- 『竹取物語』の研究ー「ぬぎをく衣」の考察
- LINE 上で行われるコミュニケーションと非言語情報の関係性について
- 国東半島の修正鬼会
- 平安時代の音楽と日本人の四季感
- 渡辺柚月 韓国ホームレス自立支援誌『THE BIG ISSUE KOREA』が確立したスタイルと韓国社会の影響

【グローバル・スタディーズコース(英語プログラム)】

- Awareness Campaign: Plastic Usage
- The Modernity of Impressionism: Eye, Camera, Brush
- How Park Wan-Suh Looks at Changes of the Times in Korea from the Colonial Era to the Korean War
- The View of Marriage in the Meiji Era: From the Perspectives of Umeko Tsuda and Sutematsu Oyama
- All the World Can Be a Stage: Participatory Theatre and Its Role in Global Society

1-4. シャカリキフェスティバル(社会学部卒業研究発表会)

社会学部 教授 内藤 暁子

シャカリキフェスティバルは、社会学部の卒業論文・卒業制作・卒業活動の成果を発表するための機会として 2009 年度からはじまり、本(2020)年度で第 12 回となりました。「シャカリキ」という言葉には、「社会学の力」という意味と「がむしやりに頑張る」という意味がこめられています。また、競うというよりも、多様な成果をおたがいに披露しあう場という意味合いをこめて「フェスティバル」と名づけられています。

例年、シャカリキフェスティバルは、1号館の3つの大教室を利用して「対面」で行われますが、今年度は様変わりいたしました。新型コロナ拡大防止のため、対面での実施は見送られ、Zoom を使ったオンラインのライブ配信となったのです。卒業制作も Zoom 上で動画をストリーミング配信する形式で発表を行うことができました。Zoom 教室3会場を設け、それぞれ3部会ずつ合計9部会が開催され、卒業論文 23 点、卒業制作6点、あわせて 29 点の発表と質疑応答が行われました。卒論発表者はそれぞれが作成したパワーポイントを画面共有で示しながら、発表を進めました。

オンライン参加者は社会学部の3年生と4年生を中心に 500 名をこえましたが、教室ではあり得ない事態が発生してしまいました。イベントの開始早々、特定会場へ参加者のアクセスが集中してしまい、Zoom 教室定員 300 名を超える事態が発生し、入室できないケースが発生してしまったのです。当初、ここまでの集中は想定してなかったため、対応が遅れてしまいました。また、参加者によって見えている「画面共有」が異なるというトラブルも発生し、発表者や参加者に迷惑をかけてしまったことが反省点です。万全の体制を整えているつもりでしたが、オンラインではイレギュラーなトラブルが起こることを改めて実感いたしました。

質疑応答に関しては、質問を Zoom のチャットに書き込む形で受け付けましたが、教室で「手を挙げる」よりも気が楽なのか、例年よりも活発な質疑応答がなされたように思います。個々の発表者に対しては内容の詳細に関わる質問や、調査方法、卒業制作の詳細に関する質問など、さまざまな角度から質問が投げられ、それらに対して発表者が丁寧に応えていました。発表者のなかには単に卒業論文の内容だけではなく、卒業論文に関わる裏話も交えていた学生もみられたため、3年生にはとても興味深かったようです。たとえば、「何故、その卒業論文テーマにたどりついたのか」といった紆余曲折も含めたテーマ選定の背景や、卒業論文の進め方のリアルな段取り、コロナ禍における調査の苦労話など、3年生にとってとても参考になったと思います。

今回、シャカリキフェスティバルに関する参加者のコメントは、Google フォームでの提出となりました。3年生からのコメントを幾つか紹介しましょう。例えば、「研究にいたった背景からその調査方法までしっかりと考えていることがわかった。自分自身のテーマを見つめ直すきっかけになった」「インタビューの方法や調査対象者、調査地の選出方法など今後の卒業論文執筆の役に立つような情報を得る事ができて、とても勉強になった」というように、今後の卒業研究に向けて、指針となったことがわかります。1月半ばに卒業研究の構想を提出し、土台作りの準備を始めた3年生にとっては、何よりの刺激でありヒントとなる機会となりました。

オンラインであったため、1-2年生のアクセスも多く、先輩たちの卒業研究をとっても興味深く思い、授業とは異なる新鮮な体験となったというコメントがみられました。4年生にとっては、ゼミナールごとに自分たちの仲間の発表を共に応援し祝いリアルな場とはなりませんでした。卒業研究の発表の現場としては十分、機能したといえるでしょう。

どのような形式になるにせよ、来年度もシャカリキフェスティバルという卒業研究発表が有意義な場となるよう願っています。

2020年度 シャカリキフェスティバル 発表タイトル

A会場:卒業論文(A-1～A-3部会)

語り/メディア 司会:中橋雄	A1	加害の歴史を語り継ぐ——毒ガスの島 大久野島から学ぶ
	A2	日本のカルト宗教から見る信者の心理状態
	A3	多メディア環境とデマ——SNSの情報拡散がもたらすもの
スポーツ/ジェンダー 司会:松井隆志	A4	プロ野球観客動員数が増え続ける要因——球団の取り組みとファンの意識
	A5	コスプレ化する学校制服——女子大生は高校制服に何を求めるのか
	A6	女子マネ差別と男の絆——マネージャーとプレーヤーは同等の関係になれるのか
アイデンティティ 司会:林玲美	A7	トリッキングの社会学——スポーツの新しいカタチ
	A8	「日本人」とは誰か——ネット上の論争から見る現代日本の「日本人らしさ」
	A9	「日本人」と「外国人」の間に引かれた境界線を問いなおす
	A10	『そして父になる』から見る血縁関係についてのイメージ——血の繋がりが親子なのか

B会場:卒業論文(B-1～B-3部会)

コミュニティ 司会:矢田部圭介	B1	団地建替えに伴うコミュニティの分断と再構築——ひばりが丘団地の事例をもとに
	B2	釜ヶ崎から始まる表現の場としてのコロシアムについて
	B3	子どもの居場所を通じた地域コミュニティ再興・強化の可能性——「遊び」でつながる「ゆるまち」
音楽/コミュニケーション 司会:人見泰弘	B4	大学生におけるコミュニケーションツールとしての音楽の有用性
	B5	現代におけるフェスの役割
	B6	音楽教育番組の構造分析
教育と職業 司会:中西祐子	B7	なぜ今「写ルンです」がブームになるのか
	B8	The Effect of Race on Income among Sexual Minority People: The Mediating Role of Support, Outness, and Perception
	B9	社会ネットワークが若年労働者の職場環境に与える影響——SEM(多母集団同時分析)によるジェンダー差の検討
	B10	韓国の大学生の学習意欲——延世大学への留学を通じて観察した韓国の大学生の学習意欲の高さの要因

C会場:卒業論文(C-1部会)・卒業制作(C-2, C-3部会)

SNS/SVOD 司会:南田勝也	C1	SNS上でのぬい撮り投稿についての文化比較——家族・友人、自分の分身としてのぬいぐるみ
	C2	食における見た目の重要性——日本の食文化と「映える」
	C3	おうち時間の変容をはじめとするSVOD市場拡大の要因
記憶とメディア 司会:奥村信幸	C4	震災の記録と記憶を伝えるアーカイブとその活用
	C5	手紙—笑顔を“つなぐ”言葉—
	C6	不登校をわかりたい
メディアの可能性 司会:松本泰幸	C7	アロハで作る野菜はいかが？
	C8	Instagramに向けたショートムービー制作 —「I-introduction-」「I-bamboo-」—
	C9	今日から情報との向き合い方が変わる！「それってほんとに正しいの？」～小学生を対象にしたメディア・リテラシー教材制作～

2. 特色ある演習科目

2-1. 特色ある演習科目(経済学部)

経済学部 教授 竹内 広宜

1. 新型コロナ拡大に伴う大学授業オンライン化とゼミ活動

他の大学と同様、本学も 2020 年度の授業は原則オンラインで実施することとなった。オンライン化に向け問題が多い中¹、授業開始に向けて環境を用意してくださった職員の方々、そして教務関係の先生方に多大なる感謝を申し上げたい。

オンライン化に伴い本学の特徴の一つであるゼミナール(ゼミ)も原則オンラインで実施することになった。ゼミナールの活動にも様々な形態があるので、全てに共通するものではないが、グループに分かれて学生同士が話し合いをする形態のゼミナールではオンラインで実施する上で、以下が課題となった。

- ① 話し合いの結果を文書成果物としてまとめるのが難しい
- ② なかなか自由に意見を出しにくい
- ③ グループを越えた議論がしづらい

担当者のゼミナールにおいて、これらの課題に対して行った活動とその結果について次節で報告する。

2. オンライン環境における特色あるゼミ活動とその結果

担当者のゼミナールは、前学期はすべて Zoom 上で実施した。グループに分かれての活動は Zoom にある会議室を複数に分割する機能(ブレイクアウトルーム)を用いた。グループでの活動成果の文書化は上記①で述べたように課題であったため、Web ブラウザ上で同時に編集できるオンライン文書ソフト(Office Online, Google ドキュメントなど)を導入した。Google ドキュメントを使い、課題に対してグループで考えた内容を文書に整理して書いている様子が写真1である。担当者は自身のブラウザ上で各グループの文書の記入状況を見ながら必要に応じてグループの議論に参加(当該ブレイクアウトルームに参加)しフォローをすることができた。ある程度考える方向性が決まっている課題ではオンライン文書ソフトを活用することで、オンライン上でも十分グループ活動ができることがわかった。

一方、「自由に発想する」や「意見を気兼ねなくたくさん書き出す」といった活動は、オンライン文書ソフトの上でも白紙の状態から実施できるが、「白紙だと逆に何もかけない」、「自由に色々な場所にメモが書けない」といった上記②の課題が生じた。そこで、本ゼミナールでは、白い巨大な紙にポストイットなどを貼る活動を Web ブラウザで実現するオンラインツール(Digital Mural とゼミナールでは紹介)を導入した。Digital Mural では白い巨大な壁に、あらかじめ枠を作成することができ、参加者はその上でアイデアを書いたポストイットを匿名でも貼ることができ(写真2)、また、投票機能も使え、どのアイデアがよいかを評価することも可能となっている(写真3)。本ツールの利用を通して、オンライン環境でのフリーディスカッションで有効であることがわかった。

1 例えば方針決定など。規模など違いがあるため直接比較することに意味はないが、方向性を速やかに決定し準備を進めた大学に比べ1ヶ月半遅れていたことがわかる(コンピュータソフトウェア 第37巻3号 pp.2-8 より)。

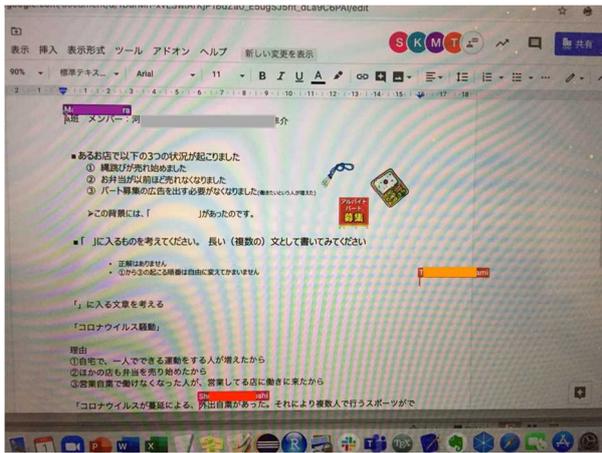


写真1: Googleドキュメントを同時に編集しながら課題に取り組む様子

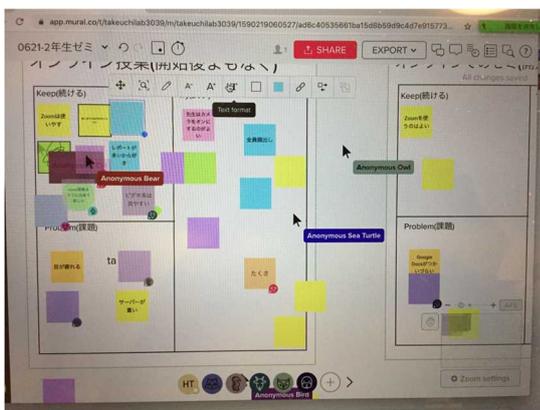


写真2: Digital Mural 上の付箋の添付



写真3: 付箋への投票結果(赤丸が投票数)

前学期のゼミナール活動を通して、課題①②について解決手法の評価を行うことができた。一方、後学期のゼミナールでは 10 月に対面形式で行ったところ、学生から「対面だと他のグループの様子が見えるのがよい」「対面で慣れた雰囲気がオンラインでも継続できるか不安」といった課題③があらたに生じた。そこで対面と同様に時間と空間を共有できるバーチャルゼミ教室をオンライン上に作成した。具体的には SpatialChat と呼ばれるオンラインコミュニケーションツール上に本ゼミナール独自の教室環境を設置した(写真4, 5)。



写真4, 5 SpatialChat 上のバーチャルゼミ教室(左: ログイン画面、右: 教室レイアウト)

ゼミナール活動では写真6のように画面共有をしながらの全体説明を最初に行った。その後、各メンバーが所属するグループの場所に自分のアイコンを移動し写真7のようにグループ活動を行った。

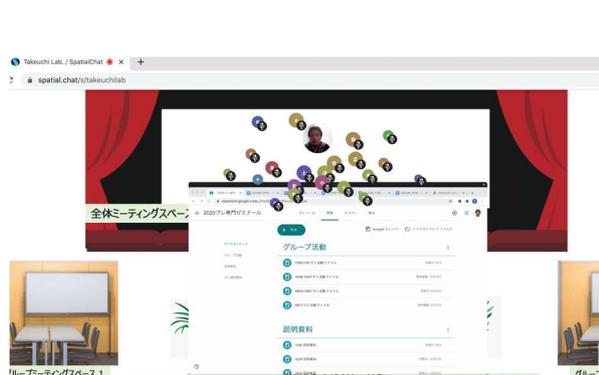


写真6 画面を共有した全体説明の様子



写真7 各グループの活動

バーチャルゼミ教室では、距離が近い人ほど声がよく聞こえ、遠くにいる人の声は遠くなる。この仕組みを利用すると、各グループ内で議論ができるとともに、隣のグループの様子を聞くこと、声がけをすることが可能になる。Zoomなどの会議ツールでは、グループ活動が完全に独立するため、グループを越えた交流が少なくなるという課題があるが、バーチャルゼミ教室ではこの課題が解決できることがわかった。一方、バーチャルゼミ教室は使っているソフトウェア(SpatialChat)が必要とする計算機リソースが多いため、学生が利用しているPCやネットワーク環境により十分に動作しないケースもあることがわかった。このようなケースに運用上の工夫をしていくことが課題である。

以上の本ゼミナールではオンライン環境で効果的にゼミナール活動を進める施策を実施・検証した。2021年度以降も、このような仕組みを活用し、ゼミナール活動を活性化させたい。

2-2. 特色ある演習科目(人文学部)

「コロナ禍におけるミュージアムのデジタル化」におけるワークショップ型授業(人文学部)

人文学部 小森 真樹

授業のオンライン化に伴い、本年度の担当科目では「デジタル人文学」を旨とした授業を実施した。デジタル環境を活用して研究に取り組みながら、デジタル環境がいかにかに人文学知に影響するのかを自省的に考えるものである。例年は「アメリカのミュージアム」を主題としている専門ゼミナール「英語圏文化ゼミナール」でも、今年度は「コロナ禍におけるミュージアムのデジタル化」を主題とした調査演習を実施した。

演習は、前学期の「ミュージアムについて学ぶ」から、後学期の「ミュージアムを作る」へとステージが次第に進行した。すなわち、前学期授業でミュージアムのデジタル対応について調査した結果を、同じく前学期に学んだデジタル展示の方法を応用して、後学期授業では制作・公開するという方向でまとまった。「演習は生モノ」と言うように受講者の興味関心や技能にしたがって流動するものであるが、今回の授業では幸いこれが成功した。各人が持っている技能を組み合わせ、結果的にはこれらを実現することができた。

より具体的には、オンラインでの展示プロジェクト「武蔵大学ヴァーチャルミュージアム(Virtual Museum at Musashi University, VMMU)」を立ち上げた(※概要・写真は次頁に掲載)。2020年11月には、オンラインでの開催となった白雉祭と時期を合わせて第一弾企画展「コロナ期のピクトグラム」を公開した。ウェブサービス cluster を利用して武蔵大学のキャンパスをヴァーチャル空間に再現し、展示を実施した。運営は企画・制作・広報とチームを分けて、展示物やヴァーチャル空間の制作、ロゴや広報動画の作成、各種 SNS の運営、広報イベントやインタビュー回答などを進めつつ、全体ミーティング(Zoom)およびオンラインオフィス(Google Classroom と Slack)で情報を共有した。

第一弾は、会期約二週間中に 215 名の参加があり、学内広報誌からの取材を受けるなど、少しずつではあるが着実に反応をもらった。フィードバック(事業評価)に関しては、演習参加者には期末レポートとして総括させ、「自身の活動・貢献内容」「授業参加から得た学び(例: アイディア、思考法、チームワークの方法、経験、人とのつながり等)」および「自身の今後活動への活用」の三点について言語化させた。受講者の反応には、芸術の社会的価値、ユニバーサル教育や教育格差などについて実感を持って学習できたという声のほか、就職活動や人生設計への大きな学びを得たという声も多かった。他方で、チームワークについての失敗から反省的学びを得た学生もおり、オンライン形式やワークショップ形式で受講者同士や学生教員間のコミュニケーションに講師も感じていた課題であり、今後の授業設計に活かしたい。また別のフィードバックとして、展示参加者へのアンケートや聞き取りも実施した。実施は学生の卒論研究の一部でもあり、その他のゼミナール生に関しても、卒業論文指導と有機的に連携する場面も多く見られた。

進捗および今後の展開としては、まず、ウェブサイト形式の第二弾展示「デジタル格差を見る——コロナ期のミュージアム世界地図(Visualizing Digital Divide: Museum World Map in the Age of COVID-19)」も実施直前である(予定は1月前半公開でほぼ完成したが、諸般の事情により公開延期中)。また、今年度の参加者からも多くの希望が出たが計画段階で終わったものに、各所との連携がある。例えば、練馬・江古田等の商店街など地域の商業活動、日本大学芸術学部など他大学、練馬区立美術館など美術館や博物館、本学学芸員課程および図書館、オンラインイベント事業者などである。また一方で、学内の各先生方の授業をコンテンツに展示を企画するなど、授業間での連携についても学生の関心は非常に高かった(次年度以降にもご関心の先生方がいらっしゃいましたら、お気軽にお声がけいただければと思います)。これらは次年度以降の事業で計画的に組み入れたい。

本事業はコロナ禍の教育の取り組みとして実験的に始めたものであったが、結果的には、ワークショップ型授業やオンライン授業の可能性と限界を確認できた。本学のように非制作系かつ小規模な大学でもこうした取り組みは可能である事は大きな発見だが、同時に予算やカリキュラム上の課題も痛感した。今後も試みを続け、協働的な教育や産学連携、芸術実践など、柔軟で幅広いゼミの可能性を探っていきたい。

https://l-tike.com/lweb/login?p_transPageId=1

【企画概要】

武蔵大学ヴァーチャルミュージアム(Virtual Museum at Musashi University, VMMU)プロジェクト

○第一弾企画展

「コロナ期のピクトグラム」

期間:2020年11月3日(火)10:00~11月17日(火)23:59

<イベント公式リンク>

Website: <https://sites.google.com/st.musashi.ac.jp/komori/vmmu?authuser=0#h.42>

Twitter: <https://twitter.com/VMMU3>

Instagram: <https://www.instagram.com/komori.museum2020/?hl=ja>

TikTok: <https://cutt.ly/okBpWR6>

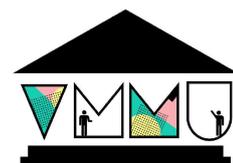
その他紹介記事 「cluster に武蔵大学ヴァーチャルキャンパス「ヴァーチャルミュージアム」を公開(11/1 予定)」<https://phoiming.hatenadiary.org/entry/2020/10/29/192642>

学内広報誌によるロングインタビュー「ムサシのゼミの VR プロジェクト『ぶみゅー』ってなんだ!!」
<https://cutt.ly/rkBp01W>

○第二弾企画展

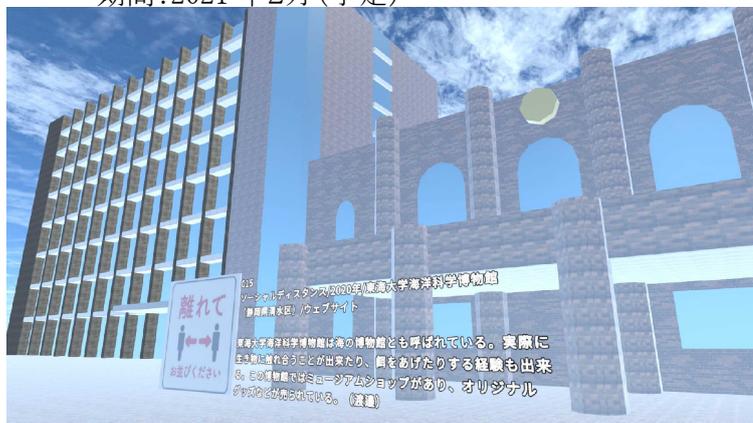
「デジタル格差を見る——コロナ期のミュージアム世界地図 Visualizing Digital Divide: Museum World Map in the Age of COVID-19」

期間:2021年2月(予定)~



Virtual Museum at
Musashi University

プロジェクトロゴ



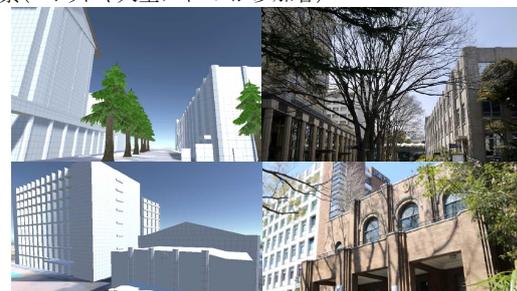
展示風景



展示風景(ロボットや人型アイコンが参加者)



展示物



キャンパス景色とヴァーチャル化したキャンパス



制作風景(プログラミングの様子)

2-3. 特色ある演習科目(社会学部)

社会学部 教授 松本 恭幸

地域メディアと地域づくりをテーマにした社会学部メディア社会学科松本ゼミ(2、3年生)では、前年の秋にゼミナール募集を行って選考した各学年 15~20名の学生達が、少人数のグループに分かれて教員も同行し、国内(過去にはインドネシア、台湾等の海外も)各地にフィールドワークに出かけ、そこで取材したことをCATV局(過去には衛星放送)の番組にまとめて配信しています。

2020年は、正式にゼミナールが始まる前の春休み期間中の2月から11月にかけて、計12回、延べ35日間のフィールドワークに出かけました。

2月:北海道(3泊4日)、北海道(4泊5日)

7月:岩手、宮城、福島(3泊4日)

8月:福岡、熊本、宮崎(5泊6日)、兵庫、和歌山(2泊3日)、長野、山梨(2泊3日)、長野(2泊3日)

10月:神奈川(1日)×2回、群馬(1泊2日)、都内(1日)

11月:茨城(1泊2日)

そしてフィールドワークでの取材先は、主な取材先は地域の様々な課題に関する情報が集まる地域メディアで、図書館、博物館のようなスペース系メディアを中心に、下記の32カ所の地域メディアを訪問取材しました。

●出版

北海道ブックシェアリング(北海道)、書肆吉成(北海道)、シャンティブックス(北海道)、コア・アソシエイツ(北海道)、中西出版(北海道)、いわた書店(北海道)、亜璃西社(北海道)、湘南ジャーナル、タウンニュース

●コミュニティFM

FMわいわい(兵庫)

●インターネット放送局

ハッピーロード大山TV(東京)、いばキラTV(茨城)

●図書館

札幌市図書館・情報館(北海道)、都城図書館(宮崎)

●博物館

北海道博物館協会(北海道)、陸前高田伝承館(岩手)、リアス・アークミュージアム(岩手)、いわき伝承館(福島)、ゼンリンミュージアム(福岡)、田川市石炭・歴史博物館(福岡)、大牟田石炭科学館(福岡)、熊本日新聞博物館(福岡)、稲村の火の館(和歌山)、満蒙開拓平和記念館(長野)、山梨平和ミュージアム(山梨)、上山田温泉資料館(長野)、もう一つの記念館・松代(長野)、山岳ミュージアム(長野)、足尾鉍毒事件田中正三記念館(群馬)

●地域アーカイブ

札幌市視聴覚センター(北海道)、仙台オモイデアーカイブ(宮城)

●NPO／NGO関係

NPO法人ふよう土 2100(福島)

そして取材したことを学生達の方で、奈良県全域と大阪府の一部を放送エリアとする近鉄ケーブルネットワーク／こまどりケーブルで、映像番組にまとめて配信しました。

またこうしたフィールドワークを通して学んだ地域メディアや地域づくりに関する様々な課題について、記事や映像番組にするだけでなく、各分野の専門家の方とのトークを通して検証するため、東久留米市のコミュニティFM局「FMひがしくるめ」で6月から11月にかけて1時間番組を12本、足立区のインターネット放送局「Cwave」で9月から12月にかけて2時間番組を4本、計20時間の放送を行いました。放送の中では学生が司会進行役兼報告者となり、学生の調査研究の成果を報告して、その内容について各分野の専門家の方と討論しました。

こうした全国各地での地域メディアと地域づくりの様々な取り組みに関するフィールドワークとその(コミュニティFM、インターネット放送での)報告以外、もう一つゼミの活動の柱となるのが、地域メディアでのインターンです。

2020年は、沖縄の読谷村のコミュニティFM局の「FMよみたん」、東京の東久留米市のコミュニティFM局の「FMひがしくるめ」、足立区のインターネット放送局の「Cwave」、神奈川県平塚市の地域情報紙「湘南ジャーナル」に、学生をインターンに派遣しました。

このようにゼミの学生は、地方でのフィールドワークと地域メディアでのインターンでの社会経験を通して、就活の方向について絞り込みを行い、秋からはヤフー、凸版印刷、博展、ムラヤマ、イツコム、IIJ、PRTimes、スターダストプロモーション等のメディア関連企業に就職したゼミナール卒業生が、メンターとして学生の就活の個別指導を行っています。

こうしたゼミでの経験値をベースにした就活で、ほぼ全ての学生が4年次の5月までには就活を終え、6月からは3年次に行った全国各地でのチームでのフィールドワークの経験を踏まえて、今度は個人で全国各地に出かけ、そこでのフィールドワークをもとに地域の抱える様々な課題について卒業論文・卒業制作に取り組んでいます。

足立区でこれからの地域メディアを考える
首都圏各地のユニークな地域メディアの取り組みを紹介するとともに、これからの地域メディアのあり方について考えます

武蔵大学

12月5日(土)14時~16時
公開生放送

MC 渡部花梨、佐藤睦也

足立区のインターネット放送局「Cwave」で放送しているトーク番組